

# APCV2016 報告

鯉田孝和（豊橋技術科学大学）

koida@eiiris.tut.ac.jp



図1 APCV2016 ロゴ

本年のAPCV，第12回アジア太平洋視覚科学会議は，2016年7月14～17日の日程でオーストラリア西岸の観光都市，フリーマントル(Fremantle)で開催された．主催はDavid Badcock氏(Univ. of Western Australia)で，組織委員会の大半も同大学やMurdoch大学（どちらも西オーストラリア州パースにある）のスタッフで構成されているなど，地域性の濃い組織であった．

参加人数は152名，半数（79）がオーストラリアからの参加者，ついで日本，韓国，台湾が占めていた（図2）．152名というのは例年のAPCVと比較すると小規模であるものの，参加者が一体感を感じる規模としては過不足無い数とも言える．会場のホテル（Esplanade hotel：図3）は，オーラル会場，ポスター会場，昼食，懇親会，そして宿泊が備えられており，さながら合宿形式での開催であった．

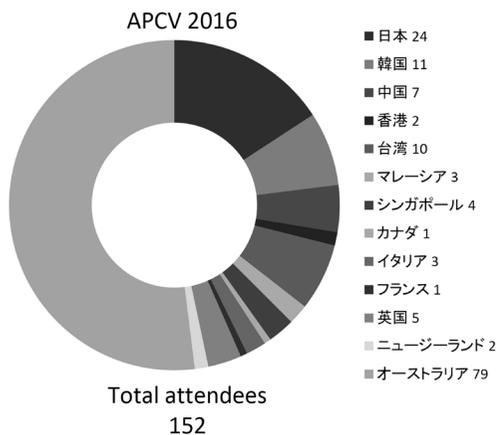


図2 参加者統計



図3 会場のEsplanade hotelの外観．観光スポットに位置し，週末には大勢の観光客が周りを散策していた．

大会は3つのキーノートスピーチを中心に、2つのオーラルセッションが平行に開催され、合間にポスターセッションの時間が設けられていた。ポスター件数は一日あたり20程度で、コアタイムが1時間強と短めではあったものの丸1日貼りっぱなしであるため、ランチやコーヒープレイクの時間などに見る時間があった。その一方で、オーラルセッションは2つ同時並行しているために、半分のトークが聞けないというのは残念であった。

キーノートスピーチ1つめは西田眞也氏(NTT)の「Motion perception: From a dark room to the real world」で、彼の運動視知覚に関する基礎研究(運動検出、残効、二次運動、運動統合)から、最近の液体などの質感に関するまでの総レビューとなっていた。西田グループからの研究は日本視覚学会でも多く拝聴する機会があるものの、全体を一つのストーリーでまとめてトークを聞いたのが筆者は初めてであったため、個人的には非常にエキサイティングであった。

キーノートスピーチ2つめは、Maria Concetta Morrone (Univ. of Pisa, Italy) による「Plasticity of the human visual system」で、視覚の可塑性が大人でも強く起きることを人工視覚、心理実験、MR計測などから多角的に明らかにした研究者である。今回はその中でも片眼に眼帯をしばらく装着する「Monocular deprivation」によって、弱視や立体視盲が大人であっても劇的に改善することを示した。

キーノートスピーチ3つめは、大きくテイストが変わって、Shaun P Collin (Univ. of Western Australia) による「The evolution of colour vision in ancient predators」で、海洋生物それも太古の捕食生物の視覚特性の研究であった。脊椎動物の進化をたどると、顎の無いヤツメウナギと、顎のあるホオジロザメは最初期に分化したと考えられている。視物質の数や種類、桿体の比率などは太古の生物の生態系を推測させる手がかりになるという。また、ホオジロザメの視覚特性を応用した、サーファーがサメに襲われる事故を防ぐための「迷彩」開発は、世界有数のサーフィンスポットを持つオーストラリアらしい研究でもあった。

Student Awardsは4件が授与され、日本からは光村麻衣子さん(京大、蘆田研)が選ばれた。今後のAPCVは、来年2017年に台湾の台南で、その翌年2018年に中国の杭州で開催される。また、これまで10年以上にわたってAPCV councilを務められてきた塩入氏とChoongkil Lee氏が交代することとなった。代わりに日本からは鯉田(筆者)が、韓国からはSang-Hun Lee氏が後任となる。

APCV2016のwebサイト：<http://www.apcv2016.org/>

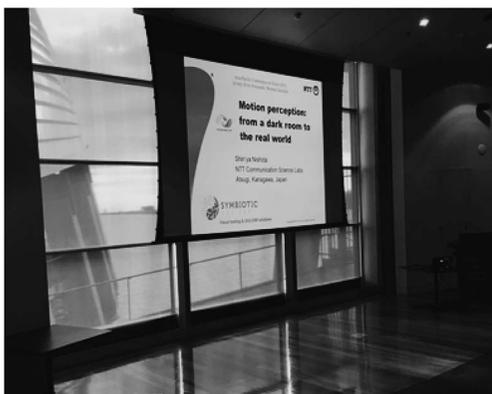


図4 西田氏によるキーノートスピーチ。初日夕方のこの講演とレセプションのみ別会場の博物館(Maritime Museum)で行われた。海に面したこの会場ではスクリーンのバックに夕暮れの海面が見えており、揺れる水面の様子はスピーチのトピックの一つ、実世界での運動知覚を予感させるものであった。



図5 ポスター会場とコーヒープレイク。